

P2-001

小児在宅支援に関わる看護職者の在宅支援の現状と課題

鈴木 智恵子、大坪 美由紀

佐賀大学 教育研究院 医学域医学系看護学科

背景：

病院と訪問看護ステーションとの連携の充実など、医療はこれまでの入院による医療から在宅療養中心へと転換している。厚労省が医療保険からの訪問看護を受ける小児の利用者は増加傾向にあると発表しており、医療的ケアを必要とする子どもが在宅生活を送れるようになり、今後も増加することが予想される。医療的ケア児等は介護保険利用者に比べ、在宅医療や訪問看護が不十分であり、ケアの中心は母親が中心となっている現状がある。よって小児在宅支援に関わる看護職者の支援の現状と課題を明らかにし、今後の小児在宅支援の一助とすることを目的とした。

方法：

2018年1月～3月にA県の総合病院小児科病棟、NICU、訪問看護ステーションの看護スタッフを対象としたフォーカス・グループ・インタビューを行った。小児在宅支援に関わったことがあるスタッフを施設ごとに施設代表者を選定してもらい、研究計画書を提示し、同意を得た。インタビューはインタビューガイドに沿った内容で行い、インタビューにかかる時間は1時間を予定し、延長する場合には参加者の了承を得た。

結果：

インタビュー対象者は4～6名の3グループ、時間は1～1時間38分であった。在宅支援に関する経験から在宅支援を行う看護職者に必要な支援として、在宅の部屋の構造や物品の準備、部屋の配置など「物的な環境調整」、母親と訪問看護師の関係づくりや社会支援の必要な家族へのメディカルソーシャルワーカーへの依頼など「人の調整」、医療機械や社会保障サービスを受ける「福祉サービスの制度の理解」、「母親が行う子どものケアの教育支援」、職種間で異なる「退院時期の見極め方」、医療機関と訪問看護ステーションなど「関係機関の交流」、「子どもと家族を取り巻く人々のネットワーク構築」が抽出された。

考察：

小児の在宅支援に関わる看護職者は退院後の生活のため在宅への環境調整や物品・人の調整を優先して行い、子どもと母親を支えていると考えられる。福祉サービスの制度への理解不足や退院時期の認識の違いを感じており、子どもと家族が安心して自宅に帰ることができる支援につなげようとしていると考えられる。また他の医療機関や訪問看護ステーションとの情報交換を行うことで子どもと家族に対するケアの充実を希望していると考えられる。今後小児の在宅支援を支える医療者や関係機関のネットワークづくりを進めていく必要性も示唆された。

P2-002

医療的ケアが必要な在宅療養児の父親が家庭内での役割を獲得するプロセス

草野 淳子、高野 政子

大分県立看護科学大学 看護科学部

【背景】

医療依存度が高い在宅療養児の主な介護者は92%が母親であり、負担感は大きく、一緒に暮らす父親の支援や理解が重要である。

【目的】

本研究の目的は医療的ケアが必要な在宅療養児の父親が家庭内での役割を獲得するプロセスを明らかにすることである。

【方法】

調査期間は2018年5月～7月であった。対象者は医療的ケアが必要な在宅療養児の父親6名で、1名につき1回の半構成的面接を行った。インタビューの時間は平均51分であり、インタビュー内容は許可を得て、ICレコーダーに録音した。データの分析方法は修正版グランデッドセオリー（以下M-GTA）を用いた。本研究はA大学の研究倫理安全委員会の承認を受けて行った。

【結果】

文章中のカテゴリが『 』、サブカテゴリは〈 〉、概念は【 】で表す。分析の結果26の概念と、8個のサブカテゴリ、3個のカテゴリを生成した。父親は子どもが生まれると【出生直後の大変さ】を実感し、【子育ての想像がつか】ず、『最初の戸惑い』を感じていた。妻と二人でケアを覚え、【いろいろなことにチャレンジ】した。【障害があっても自分の子ども】であり【ケアをするのは当たり前】と思い、〈現状を受け止めていた〉。生活は変化したが、子どもは【家族のリズムに溶け込ませる】ように工夫した。【医療処置は協力して行い】、『一生懸命ケアを手伝う』っていた。〈ケアの中心は妻〉であり、【妻の指示に従う】た。〈父親の役割〉は【サブの役割】であることを自覚し【経済的役割】【家事】【役場の申請】をしていた。【妻に申し訳ない】と感じ、介護は【休日は担当】し、【妻に時間をつくり】、【妻の負担を軽減】していた。一方で【手伝いたい時間が無い】ことも生じていた。【子どもが大きくなった実感】をし、次第に〈子どもがかわいい〉と感じ、【少しでも元気に】育ててほしかった。〈それなりの生活を確立〉し、【出生直後に比較すると状態安定】したため、【家族で外出】をしていた。

【考察】

家庭内で主に子どものケアを行うのは母親であり、父親もケアを手伝うがサブ的な役割をしていたと考える。父親自身もそれを自覚し、妻の負担を少しでも軽くするために、休日のケアや家事を担当していた。生活と子どもの状況が安定するに従い、子どもの可愛さを感じていたと考える。

本研究は平成27年度～平成31年度科学研究費助成事業（基盤C）の助成を受けて行った。